家族の復権？ 多様な形態の家族!

2018 年 8 月 25 日（改定）

映画「娼年」と「家族はつらいよⅢ―妻よ薔薇のように」と、「万引き家族」の比較を通して

青野 豊一

万引き家族

『崩壊 5 段階説』(ドミートリー・オルロフ 大谷正幸訳 新評論)によれば、社会は次の段階を経て崩壊していく。①金融の崩壊②商業の崩壊③政治の崩壊④社会の崩壊⑤文化の崩壊とされている。①と②は、今の社会経済システムでは、人為では止めようがない。だから、*今なし得ることは、③の段階の崩壊を食い止めるために、それができるような人的資源の育成をすることに意味がある*であろう。これこそが、私たちがしなくてはならないことであろう。

今後の社会では、エネルギーの制約(石油の枯渇)という厳しい事態になることは間違いない。私たちはライフスタイルの変更をしなくてはならない、否応なくパラダイムチェンジに迫られる。だから、私たちは、マスコミ等を通して日々垂れ流しされている情報に溺れることなく、理性を働かせて未来を展望しなくてはならない。そのためには、情報処理能力、編集能力を高めなくてはならない。そして、パラダイムチェンジを図れる人たちを、既成の価値観そのものを置き代えていくことのできる人たちの集まりを、多様に形成しなくてはならない。これが、私たちが意識的に行うべきことであろう。多くの大衆の意識が社会の成り行きに従って変わることを期待しても、それは難しいことである。

> *動乱と苦悩の日々が始まったのだ。ひとびとは，いまと同じ信条，いまと同じ制度のもとでみんなが幸せに思えた時代を懐かしむ。どうしてこの信条が非難されねばならないのか。どうしてこの制度が廃止されねばならないのか。ひとびとは，あの幸福な時代こそ社会が隠す悪の原理を助長させたことを理解しようとしない。ひとびとは，人間を責め，神を責め，地球のエネルギー，自然の力を責める。悪の原因を自分の理性や心情には求めない。人は自分の主人，自分のライバル，自分の隣人，自分の行為を責める。諸国民は，多数の人口減少によって均衡が回復するまで，そして戦士の遺骨によって平和が戻るまで，互いに武装し合い，殺し合い，根絶し合う。先祖伝来の習慣に手をつけることや，町の開祖がつくり何百年も墨守されてきた法律を改めることを，人類はひどく恐れる。*(プルードン『所有とは何か』第一章)

社会の価値基準を変更していくには、私たちが思考し行動することによってしかありえないのだから、・・・。

さて、この本の中で著者ドミートリー・オルロフが貫いているテーマは、将来の希望的展望として、家族の復権である。家族内と地域社会の物・事・人の互酬交換関係が成立していれば、どのような社会になってもやっていけるであろうという意識で記述されている。はたして、そうであろうか?そもそも、オルロフ氏の言う「家族の復権」とは、どのようなことを意味しているのであろうか。そして、「家族」とは、なんであるのか。オルロフ氏は、どのような家族をイメージしているのであろうか。このことについて思考しないことには、この本に書かれていることの意味がなくなるであろう。

私の思っていることは、家族という形態は、場所と時代により変わっていくものだから、固定観念を強固に抱くことは間違っているのではないか、ということである。戦前のような家族関係に帰ることを期待する保守的な人たちがいるが、これは、大きな間違いなのだ。もう、いまさら、昔には戻れない。だからこそ、自民党はこのような前時代的な家族の在り方を賛美し、社会の一定数の保守的な人たちはこれを夢見ている。山田洋次監督の「家族はつらいよ!」シリーズのような三世代家庭は、どんどん減っていくことであろう。これは当然の事なのだ。昔のように、親と同じ仕事をしたり、同じ土地に若者の仕事があるということは、難しいのだから。地方や田舎ほど、難しいことになる。

現代は、家族という形態が大きく変容して来ている過渡期である、と言えよう。過渡期には、さまざまなタイプの家族が共存している。このうちのどれが良いとも、言えないものであろう。また、日本社会では、まだ多くの世帯が「機能不全家族」となったわけでもない。しかし、情報化により多様なメディアが存在するにも関わらず、だからこそ、人々の間のコミュニケーションの希薄化は進行している。このまま晩婚化、少子化が、そして未婚化が進行すれば、従来の社会的諸関係、そして諸制度は見事に崩壊していくであろう。

要は、私たちの意識が変わらなくてはならない。このような事態に対して、戦前の家族関係への復帰を望んだりする人たちがいるが、この変容に耐えられない人たちが反動としてより一層保守的になっている。そしてその一方では、今までの常識ではとても考えられなかったような家族も登場してくるであろう。こうして、社会意識が激しく分裂していくことになる。政治的に左右の対立が、ますます激しくなることになろう。

再度整理しよう。晩婚化、非婚化、そして結婚という形態にとらわれない性的関係のひろがり、同棲関係や婚外の子供の誕生、子供を持たないカップルの増加、中高年の離婚の増加、そして、生殖とセックスがすでに分離しているという現実を、まず認めなくてはならない。これまでの性的分業に支えられた雇用と福祉、そして年金等の社会制度に基づいた近代的家父長的家族が見事に崩れ去っていこうとしているという現実がある。しかしながら、この後に来るであろう新しい家族なるモノのイメージを確立することができないという激しい動乱の時期になっているということを、私たちは認めなくてはならない。そして、こうであるべきだなんていう一つの観念に固くとらわれる

ことなく柔軟に、そしてリアルに思考していくことが求められている。
・・・

今日、7/3(火)は、昼から映画を見た。蒸し暑い中での農作業に疲れを感じていたので、半日休みとした。こうしないと、1/W の休息日が、とれない労働実態であった。決意して、休息日とした。本当は、山田洋次監督の「家族はつらいよⅢ一妻よ薔薇のように」を見たかったのだが、これの上映は、午前中でもう終わっていた。そこで、今騒がれている是枝監督の「万引き家族」にしたが、次の上映時間まで二時間もあった。こんなに待つのは嫌である。そこで再度他の映画の上映時間を見ると、「娼年」は 30 分の待ちであることに気付く。そこで、これに変更した。この映画は、男の売春物語であった。つまり、娼夫の物語であった。

つい最近に是枝監督の「海街ダイアリー」をテレビで見ていたので、これと比較しつつ見た。人物への焦点の当て方、特に観客にとっての余韻のあるなしを比較した。是枝作品は、男女間のわずかな会話や所作から観客の意識を喚起し、人それぞれに想像力を働かせるものがあった。つまり、描きすぎていないのだ。余白が、ある。観客が想像力を存分に発揮できる余地・手法が細かく取れ入れられている。こう比べると、三浦大輔監督の「娼年」と是枝監督作品との質の差をはっきりと実感した。

映画 「娼年」

さて、この映画を見ていて、現代社会における人々の意識と家族ということについて、いくつか考えさせられることがあった。

①今の映画「娼年」の主人公が、将来・未来への希望を感じ取れていないことが描かれていた。だから、現状を幸福であると解釈し保守的になっていることが、うかがわれた。私から見て、ちっとも幸せではないのであるが、・・・。こう解釈しないと、悲しすぎる若者たちが登場していた。このような若者の意識については、大澤真幸「未来との連帯は可能である。しかし、どのような意味で?」(FUKUOKA　U ブックレット弦書房)を参照していただきたい。このような未来への希望をもてない意識状況の人たちが、差別的であり右翼的な社会言動を作り出している。
＊また、『二千年紀の社会と思想』見田宗介、大澤真幸(太田出版)も参照

②娼夫となっていく若者の心の奥底に、母親への疑念があった。母の愛の欠落を強く感じながら(機能不全家族で)成育してきたことをうかがわせる内容であった。この青年の動向を見ていて、何故か、宗教家の蓮如のことが思い出された。彼も母親の愛を失い、女に、妻に、母親像を重ねていたようだ。彼は、妻を次々とやり殺している。精力絶倫であった。蓮如の相手をした妻たちは、次々と妊娠させられ、それで体力を消耗し、死んでいる。知られているだけで、7or8 人以上いたとのことだ。子供は 20 人を超えている。生まれた子供たちは、女は当時の有力者に届け、男は勢力の拡大した地の寺の住職としている。これが大きな力を発揮したようだ。蓮如が勢力を拡大した北陸の地は、それまでは同じ浄土真宗の高田派の勢力地あった。これは親鸞の弟子たちの教団である。ここと露骨な対立となり、武力衝突まで繰り返していた。

さて、この映画の主人公も、男の売春組織の元締めである年上の女性に、母親の

像を重ねようとしていた。このような絶倫男の背景には、活動的な男のエネルギーの源には、母親の愛の欠落が関係しているのであろうか、なんて思ったりした。室生犀星、そして夏目漱石、等々、母の愛情の欠落していた彼らは、ともかく書いて書きまくらなくては、精神を正常に保てなかったのではなかろうか。子にとって、母親は大切な存在なのだということを、改めて感じた。そうだ、太宰も、そうであった。母に育てられていない。それも、幼児の時に世話をしてくれていた下女と突然別れている。・・・、精神に大きな傷を負っている。

③男女関係の様変わりを、明瞭に描いていた。昔は男が女を選んでいた。今は女が男を選んでいる。職につき経済力のある女性は、昔のように結婚しないと生きていけない、なんていう状態ではない。だから、女から見て選ばれるに値しないと判断された男は、恋人も妻も得られないことになっているのが現代である。それも、今流行の価値観で、すぱっと切り捨てられていく。そのため、それなりの恋愛物語を演出できない男には、結婚は遠い話となる。こうなると、地方や田舎では男女の出会いは限られているため、晩婚化、非婚化がより一層進行することになる。田舎にいては、未来はないこととなってしまう。

また、自分にぴったりと合う相手なんていないのに、どうしてもそれを求めてしまうことの、恋愛至上主義の問題が感じられた。要は、その付き合いの量と質なのに、初めから「ときめき」を求めていては、理想の実現を想定していては、・・・。家族を作るということは、ややこしい関係性の中で生きていくということなのだ。この関係性を避けていては、男女関係は築けない、家族は形成できない。それなのに、・・・。この関係性の質と方向性は、自ら造り出していくものなのに、・・・。そして、私的には、女から無視されたり、切り捨てられても、そして心が傷ついても、それでも関係をもとうと努力しなくてはならない、と思う。たくさんの恋愛の失敗経験をすることが、男にとって大切であると思うのであるが、・・・。どうも、このような失敗体験を避けたがるのが、昨今の若者たちのようだ。

男女関係が大きく変化した現代、自分の望んでいるような男と出会うことのできなかった女は、経済力のある女は、男を買うことになる。銭で束の間の夢を得ようとする。そして、また、むなしさが増してしまう。ほんの少しでもよいから興味を抱いたり好きだと思う人がいれば女から告白すればよいのだが、女の方が主導権を発揮すればよいのだが、・・・。しかしながら、特定の人との固定的な関係性を維持することは、たくさんのエネルギーを使わなくてはならない。これに耐えられないのかもしれない。だから、日々のむなしさを、金銭の交換を通した匿名の人間関係・肉体関係で癒しているのであろうか。現状ではそうせざるを得ない人たちが、増えているようだ。

つまりは、現代社会では、生殖とセックスがもうすでに分離しているという社会的現実を、まず認めなくてはならないようだ。このような変化を否定するだけでは、どうにもならないということに気付かなくてはならないであろう。この現実を認識して、家族ということについて、考えなくてはならないようだ。このことは、私としても、納得できるものである。家族内の男女関係は性的関係を軸として形成しているものとする従来の認識では対応できなくなっている、と見なさなくてはならないようだ。

④セックスを通した男女関係を積極的に肯定しているのが、現代社会である。このことを、明確に打ち出していた映画であった。これは、私も、積極的に肯定したい。陰に隠れるから、変になるのだと思う。男も女も肉体という袋を持ち、このことから逃げられないのだから、・・・。人間を、「精神」と「肉体」と「性」の入り混じった存在と認識しなくてはならない。そこで、私は、現代日本社会の性風俗をもっと開放的にすべきだと思っている。日本社会は西欧等の一神教の地とは異なり、昔から、性的関係の規制は緩やかであった。それなのに、無理して規制するから、これが犯罪や商売になるのであろう。ポルノ解禁、大賛成である。このような開放的関係性の中で、いろいろと経験を積みながら男女関係を形成していくのがよいと思う。これは、もう、変えられない流れであろうから。

　でも、この映画は買売春行為を通した若者の意識が描かれているためか、セックス場面が薄暗い映像であった。このような場面設定は、嫌だ。陽光あふれんばかりの中で、男女関係を築きたいものである。

⑤ふと思った。大杉栄の妻であった伊藤野枝の伝記である「村に火をつけ、白痴になれ」(栗原康著　岩波書店)に描かれている野枝の生き方を、・・・。

　野枝は、結婚という制度と当時の社会道徳に立ち向かった。情熱をかけて闘ったが、それらのいくつかは、ねじれながらも、現代では、実現しているということであろう。野枝は、100 年前に疾走している。未来社会に対する期待感をもって、・・・。理想社会の実現を夢見ている。

　この映画「娼年」では、家族関係が崩れ去り、家族内の互酬交換関係というものを経験したことのない若者像が描かれている。私たちが今まで思ってきたような家族関係の崩壊してしまっている中で生育してきた人たちが、登場している。そのためか、この映画の娼夫には、未来への明るい展望がない。そして、金銭関係を通した人間関係のみとなっている。彼は・・・娼夫となることで、精神の自立・自律ができ、大人になれたとしているが、・・・。心と体の交換を通した互酬関係を求めていた同じ大学の女友達を振り捨てて、・・・金銭を通した関係性のみの世界で生きようとしていた。

　これに比べ、伊藤野枝には闘うべき対象が明瞭であった。今はどうであれ、未来に期待を託すことができていた。

映画 「家族はつらいよⅢ一妻よ、薔薇のように」

⑥昨日の大雨の後、前の映画の余韻にひきづられて、またまた映画館に出向いてしまった。今日(7 月 4 日)、この日は曇りという天気予報であったが、農作業を放棄することにした。そして、山田洋次監督の「家族はつらいよⅢ一妻よ、薔薇のように」を見た。笑い転げる場面の連続である。

　この家族は、都会の裕福な三世代家族であった。幸之助は海外出張をたびたびする大企業のサラリーマンである。「万引き家族」の日雇い労働者とは、大きな違いがある。そして、この映画で描かれている家族の日々の生活には、どうにも避けられない

濃厚な関係が息づいていた。ここに登場している人たちには、家族いうものは確実に存在している。家族内の互酬交換関係が、たっぷりとある。

しかし、もし野枝が生きていたならば、ここに大きな問題を指摘していたであろう。生き生きとした生とは言い難い、ガチガチに固まっている関係性があった。長男の嫁は大変な苦労をしている。この報われない苦労に疲れ、嫁が家族関係を振り捨てて出ていったことで、家族の在り方を問い直す物語である。

特に、この三世代家族の中の、橋爪功氏の演じている祖父や長男(世帯主)である幸之助(俳優　西村雅彦)に、野枝は反発したであろう。この二人は、昔ながらの長男として育てられた典型的な人間像として描かれていた。祖父は年老いて危なっかしい行動をしているのに、家族内のもめ事を仕切ろうとする。幸之助は長男として、妹や弟たちに、上から目線で逆ギレする、謝罪はしない、そしてムキになったり、・・・。妻に対しては、自分が養ってやっているとの意識である。

このような家族が、今の日本社会において、このような濃厚な家族関係のある三世代家庭が多いのであろうか。いささか、疑問である。これは、都会の裕福な家庭の物語である。一般化できるものではない。

さて、 このような家族関係については、小野美由紀「女性装の東大教授が見つけた新しい家族のカタチ」『愛の履歴書』(講談社現代ビジネス)に書かれている安富歩氏のつぎのような言葉を引用したい。

「・・・実際はとっくに機能しなくなっているシステムをみんなで理想化し、守ろうと躍起になっているでしょ。できないことをやろうとしているから混乱する。・・・今の日本人の考える家族像って、単なる幻想。半世紀前に崩壊した「家」というくくりを異様に重んじて、とらわれて、苦しんでいる。・・・。」

安富氏はいささか過激に述べているが、私なりに解釈すると、次のようになろう。旧来の家族関係は解体されたが、それが経済の高度成長の中で、会社が疑似的なコミュニティーとなって来たが、それも世界経済の構造変化とともに大きく瓦解して来ている。こうなると、人は何物か信頼できる互酬関係の形態を求めるようになる。年長者は昔の「家制度」に幻影を求めたたりしているが、これは時代錯誤であり、無理強いすると人を不幸にするだけとなりかねないことになる。安富歩氏は、家族なんて必要ないと述べているのではない。より柔軟な緩やかな家族関係を、人間関係を作り出そうとすることが大切である。いろんな家族の形態があってもよいのではなかろうか、という意味であろう。

しかし、この「家族はつらいよⅢ一妻よ薔薇のように」の映画のような家族関係・関係性も、ある人たちからは羨(うらや)ましがられるかもしれない。あたたかい人間関係があると、・・・。これは、薄っぺらな殺伐とした都会生活からの脱出を目指している人たちからは、このように思われるかもしれない。

しかしながら、従来の家族という互酬交換関係には、大きな毒も含まれている。この濃厚な家族関係の吐き出す毒から抜け出て自立・自律するために何年も苦闘することとなることだってよくある話であろう。だから、この毒に倒されないだけのエネルギーを持てる余白のある、濃厚過ぎない緩やかな信頼関係の家族でなくてはならないと、私は思う。だから、山田洋次の描いている家族関係を、現代日本の一つのモデルとし

て考えることには、大きな問題がある。関係性が、濃厚すぎるのだ。しかし、この関係性の程度を考えながら生活していくことは、現実問題として、これは難しい。濃すぎてはいけないし、薄すぎては、･･･。まあ、日々失敗をしながら修正していくしかあるまいが、･･･。以上が、二本の映画を見ての感想である。

この日の夜から、たくさんの雨が降り出した。テレビでは、洪水警報が盛んに言われ出した。

映画 「万引き家族」

⑦そして、三本目の映画を見た。7/6(金)、あの大雨の中、またまた映画館に通った。讃岐は、災害があまりない地である。これが、今までの、この地の人たちの一般的に抱いている地理的気候的イメージで、テレビでは気象庁はあのように言っているが、どうせ、この地は、そんなに降ることはあるまい、と思っていた。しかし、近年にない雨が、やはり降った。でも、他県に比べると少ないが、家の裏の墓地に行く途中のがけや、私が稲を植えている横の道路の側面もずり落ちた。しかし、人的被害はなかった。これが、香川県なのだ。しかしながら、これから後、8 月下旬まで、ほとんど雨が降らないことが予想される。そして、水不足のニュースが全国に流れることだろう。これが、香川の真夏なのだ。まあ、このような理由で、雨の中、映画館へと車をひたすら走らせた。

映画を三本見ると、またまた心が動いた。この「万引き家族」も、現代の家族の問題を扱っていた。社会の最底辺の家族の形態を通して、現代の家族関係の問題点を、観客に考えさそうとしている作品であると思われる。血のつながらない人たちの集まりである集団の方が、家族愛を示していた。打算による相互依存でできた家族が、毎日を共に懸命に生きることで、互いを思い遣る気持ちが、そして徐々に絆を深めていく物語が描かれている。家族の在り方を、考えさせられる作品である。登場する大人は、善人ではない。一癖(くせ)も二癖もあり、ずる賢く、そして怠惰でもある。そんな人たちが紡ぎ出す家族の絆は、愛情にあふれている。一つの価値観で子供たちを縛っていない。彼らの関係性は、何と言ったらよいか、*生々しい*。家族の絆は血のつながりがあれば、自然にできるものではない。互いをそれなりに想って築き上げるものだという作品メッセージであろう。

子どもは生まれてくる時と場所を選べない。そして、一人では一日も生きていけない。もし選択の自由があったら？虐待する血のつながりのある親(機能不全家族)と、万引きをやらせる血のつながらない親との愛情のやりとりがある家族と、どちらを選択するであろうか？映画では、4 歳の子は、虐待されたり放置されていた家庭より、この偽装家族である「万引き家族」の人たちと一緒に生きることを選んでいた。食べ物があり、優しく包んでくる人間関係がある。まさに、今後の日本における家族の在り方を問う作品であった。もう一度、今度はストーリー展開にとらわれずに、登場する個々人に視点を当ててじっくりと見てみたい映画である。

･･

<昔ながらの家族を懐かしむのでは!?>

さて、ここからは、もう少し掘り下げて、現代社会で暮らす私たちにとって、「家族と

は何か」を問うことにしよう。「家族」というものに、善きも悪しきも、その多くが愛情と信頼を想起してしまうのではないだろうか。しかし、考えなくてはならないのは、近代社会に組み込まれた最小単位の集団の一つのシステムとしての家族というモノの、その変容についてである。*家族の構造や論理には時代や社会を超えた普遍的なものというより、その現れ方は時代や社会によって大きく異なるものであることを忘れてはならない。これらを踏まえ、近代社会の家族、そして現代の在り方について思考しなくてはならない。*

家族とは「夫婦と子供から構成される小規模な集団である」とするのが一般的な認識である。しかし、これは核家族説である。先進諸国に数多く見られた現象に過ぎず、歴史的・そして地理的には、家族に関する定説といった形で記述することはできないものであろう。敢えて家族を構成する最低限の定義を言えば、親子と兄弟等とは性行為を持ってはならない集団というのが最低限の秩序ではなかろうか。これしか考えられないが、これも、歴史的地理的には、そうとは、言いきれないものである。そもそも結婚とは何であろうか。社会的に承認された性的関係、そしてその関係が継続されること、そして権利と義務が生じることであろうか。しかし、これらが大きく揺らいでいることを認識しなくてはならない。

昔の結婚とは、家と家との関係であった。それが今は、個人的な事となっている。この大きな変化を認識した上で、考えていこう。日本社会においては、昨今の未婚、晩婚、離婚者の劇的な増加を踏まえ、核家族説に該当しない家族が台頭する可能性がある。国立社会保障・人口問題研究所の「人口統計資料集（2017 年）」によると、2015 年の生涯未婚率は男性が 23.37%、女性は 14.06%である。さらに、H27 年度版厚生労働白書の予測によれば、2035 年には男 29%(約 1/3 の割合)、女 19.2%(約 1/5)と予測されている。こうなると、例えば、様々な理由から従来の結婚や家族の概念にとらわれない者同士が集団で生活し、各グループが家族を自認し、これらが社会現象にまで発展することも考えられるようになる。非婚者たちが集まり一つの家族らしきものを形成することだってありうる。映画「万引き家族」のように、・・・。そうすると、どうなるであろうか。現在法的根拠のない集団でも、家族的な共同体として機能するならば、国家行政も異分子として排除するのではなく、積極的に社会内に認められる仕組みを整備することも考えなくてはならないであろう。核家族がそうであったように、*家族とは時代や社会の影響を受けて変容するものである。だから、昔ながらの家族を懐かしむのは間違っている。この変化を認め、今後の在り方を思考・試行しなくてはならないであろう。*

〈機能不全家族〉

昨今、家庭内暴力・児童虐待・育児放棄・一家離散といった家族における負のキーワードがマスコミを賑わすようになった。これらの現象は、現代の日本社会の家族というシステムがいろいろな問題を抱えているということであろう。社会構造の変容によって、家族として今まで期待されていたようなことが十分機能せず、多くの問題が生じている。つまり機能不全へと陥っていることが増えてきているためである。

＊以下に、「機能不全家族」について、Wikipedia より引用する。この言葉は、「子育て」「団らん」

「地域との関わり」といった、一般的に家庭に存在すべきとされる機能が健全に機能していない家庭の問題のことを指す。そしてこの機能不全家族で指摘される問題は、家庭内での不健全な事象よりも、その機能不全家族の中で育った子供への悪影響を問題として指摘することが多い。つまり、機能不全家族内で育った子供は、機能不全な環境や考え方が当たり前であるかの様に認識して成長するケースが多く、また幼少期の重要な人格形成において愛情を得る機会が非常に乏しい事などにより、自己愛・自尊心、他者への共感、他者の苦しみに対する理解等に欠けた人間にもなりやすい、と言われている。こうして、機能不全家族の中から「社会と健全な関係を築くことができない大人が輩出されてしまう」という結果が生じることになる。しかし、機能不全家族に生まれ育った者が全て必ず社会不適応な人間になるとは限らない。機能不全家族となる要因としては、代表的なものとして、家族構成員のアルコール依存、虐待（子供への暴言や威圧的態度も含まれる）、共依存(自分と特定の相手がその関係性に過剰に依存しており、相手から依存されることに無意識のうちに自己の存在価値を見出し、そして相手をコントロールし自分の望む行動を取らせることで、自身の心の平安を保とうとする)などが挙げられる。更に、このような機能不全的な家庭となっている場合は、その家庭を構成する親、または祖父母などが、機能不全家族で育った経歴がある可能性も高い。この機能不全家族において最も被害者となるのは、自らに生活力が無いため、その家庭から脱出することができない子供である。生活能力に乏しい子供は、このような不幸な状況から逃れることができず、歪んだ思想・観念を全身に受けながら生活しなければならない。そして、子供としての時期に学ぶべき社会規範や愛情を学ぶことができず、「親の奴隷」のような生活を強いられ、歪んだ思考を身につける事が多い。そのため、子供社会での適合ができにくく、様々な問題を引き起こす場合がある。周囲の児童から見て、彼らが何故に自由奔放に振る舞えるかが理解されなかったり、また、他の児童の目から見れば非常におとなしかったりして、他者とは異なる価値観や思考・行動パターンが原因でいじめの対象にもされやすい。親から虐待を受けた子供は、幸運にも家庭から脱出できた場合、年老いた親を殊更に冷遇したり、または暴力的支配におよんだりなどして、「親への復讐」を始めるケースも見られる。酷い場合には、自分の親と同世代の老人全てに対して理由も無く憎悪や敵対心を抱くこともあり、「老人虐待」といった別の問題を惹き起こすことにもなる。このような家庭問題の中で育った子供が、育った環境の不健全さに気づいた場合、過去に学んだ不健全な生活習慣からの脱却に向けて、莫大なエネルギーを費やして、回復の努力をしなければならないこととなる。機能不全家族の一番の問題点としては「（1）機能不全家族の中で育った子供が、育った環境の不健全さに気づかない場合に、自己の配偶者としても同様の歪んだ価値観をもったパートナーを選んでしまうこと」や「（2）親は無条件に正しく、全てを子供の原因だと決め付けて子供を泣き寝入りさせること」などが非常に多いことであろう。

なぜ、このような状況が多発することになったのだろうか。これには大きく二つの作用が働いていると考えられる。一つは、資本主義経済の一層の進展で、社会の隅々まで金銭による関係が浸透していき、家庭の在り方が劇的に変化していった。つまりは、お金による交換関係ばかりが通用する社会になったために、それまでの人的関係性が意味をなさなくなってしまっている。資本主義経済は、人と物と事の激しい流動化をもたらした。金銭による物・事・人の交換、匿名のその場限りの交換関係主導の社会となってしまい、従来の社会統合の基礎となっていた規範や道徳が弱体化してしまい、家族内のことはその当事者である家族にしか分からないというまったくの私秘

的集団となった。外側からの作用が弱まったのだ。親族も近所も、何も言うことができなくなっている。特に、子供と年寄りに対する関係が、ひどい実態となってしまっている。ここに、機能不全が端的に現れ出ている。悲しい現実を、よく聞くようになってしまった。私の近所、そして親戚でも、・・・。それも 60 歳を過ぎた息子と嫁が 90 歳に近い母親に対して、・・・。このようなことを、どのように理解したらよいのか。

①家族環境の変化は、フランスの社会学者エミール・デュルケム（Emile Durkheim 1858-1917）が『自殺論』で展開したアノミーを発生させているためであろう。

デュルケムのアノミーとは、それまでの支配的であった価値や尺度や方向付けが失われることによる社会の無秩序化を意味する。自分の欲望を抑制する規範が無効化されてしまい、無限に欲望を追求してしまうようになる状態、「欲望とは、他人の欲望」であることが当然視してしまい、歯止めのない状態のことである。

例えば、古代社会では、刑法は個人の契約で取り決められたものではなく、神・宗教上の契約という形で決まっていた。神の命令を犯すことは共同体の秩序を乱すことと同義となるから。きわめて厳しく罰せられた。古代社会の最初の宗教は、必ず共同体のルールにふさわしい形で発展してきたものである。古代社会では、このような宗教による社会システムはきわめて合理的であったともいえよう。社会の秩序を維持するため、・・・。

アノミーとは、社会規範が崩壊した状態の事である。norme とは規範のことであり、anomie とは無規範のことである。

さて、歴史的には、古代から一直線にアノミーへと社会は進んではいない。このような古代の共同体が貨幣経済の浸透により弛緩した時に、共同体の宗教では人々が生きていく糧とならなくなった時に、人々の心の支えとなったのは、一個人としての生き方、そして死に方を模索した宗教が誕生している。この時、現在世界宗教となっている仏教やイスラム教、そしてキリスト教が、社会を再び統合するものとして登場してきた歴史がある。

そしてまた、資本制生産方式の浸透でいっきにアノミー状態になったのでもない。近代的ブルジョワ社会の成立時には、それなりの norme(規範)は再編(近代的家父長制家族)されている。それがまた、この現代において、男女関係・家族関係が大きく変容して来ていることを、知らなくてはならない。愚者は経験に学ぶが、賢者は歴史に学ばなくてはならないのだ。それを忘れて、自分の描く観念に溺れて理想に浸っていてはならない。貨幣経済の一層の浸透で、社会からの影響力が急速に低下してきている現代は、それに合った新しい思想・倫理観を、思想が必要とされてきている、と思われる。このような事態を克服できる社会システムを構想しなくてはならない。

もう一つは、家族や個人の内側で働く作用の問題である。自我はどのように形成されるのか。社会がアノミー状態となり、家族に危機的状況が発生しても家族内に隠蔽されることが多い。状況次第では家族内で消化できず、それが原因で正常なコミュニケーションが行われなくなることもあるだろう。このような家庭環境で育った子供達が心的障害を抱えたまま大人になり、新たな家庭を持ったらどうだろうか。

②果てしない欲望や残虐性を精神面から抑制する自我が、ますます機能しなくなり、負の連鎖から家庭崩壊が誘発されることとなる。

フロイト（Sigmund Freud 1856-1939）は、人間には欲望の塊である「エス」が無意識下に秘んで

おり、それを自我が制御していると分析した。しかし、彼の理論は紆余曲折しており、人間の欲望には生の欲動・死の欲動（欲動二元論）があると結論づけたが、この理論が絶対的に正しいとは言い難いが、ともかく、人間の精神構造が歪み、自我の形成に多くの問題をきたしていることは間違いない。

こう家族について考えると、現代の少子高齢化社会を踏まえ、家族の未来像を、その形態、そして存在意義等を社会全体で考える必要性が生じて来る。今さかんに言われている***「機能不全家族」***には、話すな・感じるな・信頼するなという暗黙のルールが支配していると指摘する学者がいる。問題について話し合ったり、感情を素直に表したり、人を信用したりするなということである。子供がこれを侵せば虐待などの制裁が加えられる、老人は食事が与えられなかったり、室内に閉じ込められたりしている。これは極めて不条理な環境であり、正常な人格形成など無理であろう。そのため、公私両方からの家族とそれを取り巻くコミュニティーの在り方が再考されなくてはならない。公領域と私領域のネットワークの整備が公的に模索されなくてはならないであろう。「何か困ったことはありませんか」と話しかけるだけでも、効果があるのであろう。しかし、このようなちょっとした関係性も、「小さな親切、大きなおせっかい」として排除されつつある昨今である。だからこそ、人が生育していくには、些細なことでも話せる人を、周囲の人たちに相談できる関係性を築いていくことが大切な事であることは間違いない。自覚的に人間関係を築かなくてはならない、ということであろう。しかし、これがなかなかできない人たちが、難しい人たちがいる。

〈家族の責任?　母親の責任?〉

さて、先に「機能不全家族」についての説明を記載したが、これは、昔は家族としての機能が正常に働いて、現代はそれが機能不全となっていると言うことであろうか?

このことを考えなくてはならないが、実は、はっきりしている。昔の家族において、現代的な意味での正常な機能を果たしていたとは言えないのだ。昔の社会では、家族というものの在り方が、子供たちの成育の仕方や老人たちの生活はその時代特有の形態をしていたのであって、社会から期待されていた機能は現代社会とは異なっていたのだ。期待される家族の機能の質が違っているのだから、昔が良くて現代が悪いとするのは、大きな間違いである。

また、「機能不全」と言われている場合の家族の現代的「機能」とは、いったいどのようなことなのか。近代社会では、家族にどのようなことを期待してきたのであろうか。そして、現代社会では、・・・。このような思考が問われてくるであろう。

〈誰も生まれず、誰も死なない世界を想定してきた
これまでの近代社会論こそが、問題!〉

＊ここからは、岡野八代(同志社大学)氏の書かれている文章を参考にして考えていきたい。

家事労働は私たちの生命を維持していくために、誰かが日々、必ずしなくてはならないものである。そして、終わることのない、この労苦によって社会的な公的なことを裏支えしているものである。そう、古代のギリシャ社会の奴隷労働のように、・・・。この奴隷労働が公的に廃止されると、そして特に近代では、家事労働は社会との関係の切

れた私的なことしてみなされてきた。次の世代の誕生と養育、そして老人たちの最後を見守りあの世へと送り出していくことは社会全体の事柄なのに、その機能を私的な家族の愛情という自発性によるものと見なされてきた。つまりは、恣意的なものとなった。愛情と配慮という個人的熱意に依拠して実現されるものとなってしまった。そしてそれは、女の役目として、・・・。そのため、子供が生まれると、ある一定の期間は公的なことで不利益を被ることを当然のこととして、自主的に認めなくてはならないという地位に女性がいる。映画「家族はつらいよⅢ一妻よ、薔薇のように」に描かれているように、妻はあの日々の労働、年老いて少しボケボケし始めた父と母たちの世話をし、子供たちの養育をして、さらに家庭内の掃除や洗濯というさまざまな雑事を忙しくこなすことは、自らの意志だけで選択したものではない。しかしながら、強制されたものでもない。これらの事は、これまでは女という自然的特性によって説明されてきたが、・・・。そして、昨今では、複雑な社会関係の中で以前に比べて、より一層の負担が妻・嫁にかかってきている歴史と現実がある。この映画では、とうとう妻は眼前の日常生活から、家族から逃げたしてしまった。そして、残された家族は、大混乱となった。嫁であり妻である女性に、家庭内のすべてのことが、すべての人が頼り切っていた生活が、加重負担の実態が明らかになった物語であった。

さて、これらの事を一言で言えば、これまでの近代的諸制度は、現実との齟齬が大きくなってきているとまとめられるであろう。例えば、幼児期と老齢期は一人の力では生きられないということ、多くの人たちの手助けがいるということを、十分な配慮に入れていない近代的思想と諸制度に大きな問題がある、と言える。

岡野八代氏の「規範理論における主題としての家族」という論文の注に次のように書かれている。

「多くのフェミニスト理論家が、主流の政治理論における「主体」が自律的個人を想定しており、そのことは、政治的な主体が常に健常者で他者に存していない者、というだけでなく、他者をケアする必要から解放されている意味する、という点について批判している。・・・社会的フェミニストと自称するエルシユテイン(1941-2013 アメリカの政治学者)によれば、「(＊これまでの近代の)契約論は、静的なものの見方である。なぜなら、それは、同意する合理的な成人からなる図を提示するものだから。つまり、誰も生まれず、誰も死なない世界である。子供、老人、病人、死に行く人たちといったケアを必要とする者たちは、どこにも見られない」

まさしく、きわめて正しいことが、書かれている。これは、家族の事は個人的な事であるとする近代社会の建前そのものが、激しく問われているのであろう。近代は家族というものが公的な機能としては否定されていながら、その実、家族のもっているとされた諸々の機能にたくさんの期待(社会の裏支え)が寄せられた時代であった。それが公的に社会システムとして議論されることなく、・・・まったくの私的な事柄として、・・・。

近代以前は、財産と姓名を受け継ぐといことが重視されていた。それが近代社会では、子供の養育と老人の介護ということを通して、日々の食事をともにしていくことで、愛情をもち、注視し、そして共感して、ケアされる立場の人たちの個別の要求に対応していくことを通して、家族の個々人の精神と身体を形成していくという道徳的精神的

機能が、家族に期待され重視されてきた。公的に表立って議論されたり評価されるのではなかったが、・・・。近代社会を支えている諸個人を形成していくものとして、社会生活を裏支えしていくものとして、・・・。

しかし、現代は、このようなことを、家族に大きな期待をすることが難しくなってきている、ということであろう。核家族による子育て、婚外婚の増加、そして非婚や離婚等による一人住まい等の諸形態の家族では、これまでの家族関係によるような機能に大きな期待を寄せることはできないであろう。そのため、「機能不全家族」となっている家族関係がマスコミ等で繰り返し取り上げられている。そして最後は、母親たちが悪いためである、とされている。

〈ケアすることと、ケアされることを、・・・全社会的に支え合う〉

これまで賛美されてきた近代的市民像は、実は、大きな問題をもっているものであった。ここに、大きな問題が存在している。だから、「機能不全」として、親たち、とくに母親だけを批判することは、大きな過ちであろう。ケアすることと、ケアされることを一つの基本的権利として保障して、全社会的に支え合うものとしなくては、「機能不全家族」はなくならないであろう。家族のもつ諸々の機能は、良くならないであろう。

ここで考えなくてはならないことは、よく言われる母子一体ということは正しいことなのか?ということだ。子供と母親は、そもそも別の存在であることを忘れてはならないであろう。子供は母親にとって、自分の思う通りにならない、予測不可能性の高い、そして一番身近な他者であることを忘れてはならない。母と子の間の軋轢、そしてストレスの蓄積を忘れて、家庭こそ安全安心の場所と見なすこと自体が、間違いであろう。子供は母から生まれるとしても、別の興味関心、親とは異なったアイデンティティを形成する存在である。このため、母親だけに子育てを強要すると、そして嫁による年老いた親たちの介護を任せると、何かの機会で「機能不全家族」へといっきになってしまいかねない。例えば、室内への閉じ込め、そして食事抜き、そして身体的虐待へと、・・・。もう、このようなことが、田舎に住む私の周囲には起こっている。現代では田舎には子供が少ないから、年寄りへの虐待として現れ出ている。このような虐待をするのが、なんと、60 歳を過ぎた嫁と息子たちである。

このように整理していくと、家族とは、世代・性差・能力、そして出自に大きく異なったものが集まっている存在であることに気付く。この複雑な関係性に注目してこなかったのが、家族の事は社会的なこととは直接には関係しない私的な事として蓋をしてきたのが、これまでの近代社会の建前であった。ここに、問題の根がある。

例えば、夫にとって妻は異星人であり、妻にとって夫はこれまた異星人なのだ。これは間違いない。家族を美化してはならないのだ。複雑な関係性が、濃厚な日々の生活に溶け込んでいるややこしい関係性なのだ。当然、いろいろと問題が発生することになる。だとすれば、家族の事を私的なこととするのではなく、これこそが社会生活の根幹であると見なさなくてはならない。このことを大前提とした社会理論を作り出さなくてならないことになる。つまりは、これからの未来社会展望としては、私たちがこれまでの歴史で作りだしてきた三つの交換関係＊の中で、この家族関係のような互酬交換関係を主軸とした社会関係を形成しなくてはならないことになろう。

＊「互酬交換関係」、「収奪・再分配」、「市場での貨幣によるその場限りの交換関係」

この視点をさらに進めると、「万引き家族」のような血のつながらない家族もあってよいのではなかろうか、となろう。ここに、未来の家族像が描けそうである。例えば、同性や異性の性的関係のない未婚者同士が集まり合った家族があってもよいのではなかろうか。このような従来にはない「家族」をも認め合う法体系や社会システムにしなくてはならないであろう。

・・・

映画 「万引き家族」二回目

7 月 14 日、また、「万引き家族」の映画を見た。「機能不全家族」と「偽装家族」を、対比して描いている。万引きを教えているこの家族は、生々しい家族愛を示している。そのため、子供たちは以前の血のつながりのある家族の下に帰ることを拒否していた。映画を三本見て心が動き「家族の復権!?」という自分なりのまとめをしようとしたのだが、どうも心の座りが良くない。このような一般的なまとめでは良くないのではないか、という心が沸き起こる。そこで、暑くてたまらない日中に、普段は室内で休息している時に、映画館に急ぐことにした。今回はストーリーより、個々人の心理と監督のカメラワークを意識して観た。

この映画は、遺伝的つながりのある「機能不全家族」と、血のつながらないが生々しい家族愛にあふれている偽装家族を対比して描くことで、家族とはなんであるのかという問いを発している映画であった。映画の最後の場面は、悲しい。実の母親の下に帰った 4 歳の女の子が一人、ベランダでビー玉を集めて遊んでいる。あれでは、飼い犬と同じである。あのままでは、あの子も、母親と同じ道を歩むことになるであろう。

しかし、あの愛情あふれる関係を作り出している「万引き家族」にも、大きな問題がある。やはり、法的・社会的に承認された夫婦関係であり親子関係性でなくては、現状の社会では大きな無理がある。傷つくのは子供たちであり、介護を必要とする年寄りたちである。実の親たちから虐待されたり捨てられていた子供たちには、「万引き家族」で描かれていたような関係性だけでは、大きな問題がある。やはり法的・社会的に承認された関係性にしなくてはならないであろう。そうでないと、例えば、学校に通えないことになる。多くの人との対人関係が築けないことになる。死去した者を埋葬することもできないことになる。ここに、今後の社会保障制度の改革の課題がある。

そのため、この人たちの関係性は濃密ではあるが、彼等は、私としてはうまく言えないが、つねに不安を抱いて刹那的に、社会の隙間で生きていると言えそうだ。だから、それぞれの不安を埋め合うように肩寄せ合って暮らし、同時に秘密が露見することに対する不安を共有している。そして、最も幸せな瞬間にもそれは消えない。だから、より濃密な家族関係を求めあう。まさしく、生々しい関係性が生まれていた。

さて、最後に、この映画の問題点を述べたい。映画「万引き家族」では、4 歳の女の子の実母の母親としての在り方を批判的に映し出し、偽装家族である「万引き家族」の母親(安藤サクラ)の愛情あふれる行為と対比している。しかし、このような映像だけで終えていては、・・・。すべては、母親の質の問題へと集約されてしまうことになりかねないことになろう。あの実母のような「機能不全」家族に対するケアを、少しでもよい

から映像として描くべきではなかっただろうか。そして、さらに、法的救済に向けた取り組みの一端を描かないと、あれでは、未来展望がない。次回は、このような子供や老人たちに愛情をかけられない、放置 or 虐待している家庭の変容に焦点を当てた映像を期待したいものである。

・・

最後に、まとめらしきものとして

さて、偽装家族の生々しい家族関係を見た以上、私なりの展望を書かなくてはならないであろうが、・・・。近日中に、また観に行こう。そのうえで、もっと思考しよう。この映画は、このような視線に耐えられる映画である。ともかくはっきりしていることは、今までの家族の在り方を懐かしんだり、家族の形態が変容していることをマイナスイメージで把握しないことであろう。昔の家族形態への郷愁の視線で、論じることはしないようにしなくてはならない。そのための確認事項として、

●人間が生きる意味・目的・目標はいろいろあるが、あるたった一つの理由に行き着くと言えよう。それは、人やさまざまな組織(協同体)と結びついた人的関係性を持つことであろう。他の人たちとの結びつき、絆を形成することであろう。愛情であったり、友情であったり、あるいは貢献・奉仕であったり、金銭・物品・名誉等、それらをやり取りすることで強い関係性を築くことあろう。

しかしながら、繰り返すが、この家族の関係性が強い毒を放つことを、忘れてはならない。ここに、難しさがある。だから、他の交換形態(例えば、市場での貨幣による匿名のその場限りの関係性等)との兼ね合いこそが大切なものとなろう。つまりは、緩やかな、隙間のある、失敗も認め合えるおおらかな関係性とならなくてはならないであろう。これが、現在の社会制度の下では、難しくなってきているが、現状の家族という親密な関係性の中身であろう。

映画の中で、偽装家族の祖母と母親が海岸で話す場面があった。安藤サクラ演ずる母親が言う。本当の親子関係でないから、過大な期待をしないからこそ、うまくいくと・・・。適当な距離感を推し量りながら生きていくからこそ、気づかいしながら生きていくからこそ、・・・と。この妹として松岡茉優が演じている亜紀は、親の期待に値する子供でないために、捨てられていた。周りにはオーストラリアに留学しているとして話しているが、・・・。この親のうそを知りつつ、祖母(樹木希林)は亜紀をこの偽装家族の一員として受け入れている。

●資本主義経済は、現代日本の社会の隅々までの浸透している。このため、これまでの人的つながりは分断されてきた。現代社会は絆が失われやすい。絆がない人間は狂人になる。狂人があふれる社会が健全なはずはない。教育の場は、この人間関係作りに最適なものでなくてはならないのに、それなのに、日本の教育システムは、いまだに偏差値教育をしており、この現代社会の問題点を理解しようとしていない、そのために見事に狂人を育成する。是正するどころか助長するという最低・最悪のシステムであろう。これは、間違いない。今の教育システムは、見田宗介のいう「第一世代＊」そのままである。ここに大きな問題がある。

●この三本の映画から分かることは、私たちは、家族の在り方について、真剣に考えなくてはならない時期に来ていることは間違いない、ということであろう。どのような形

態が、望ましいのか? 近い未来の本格的な縮小社会では、どのような家族形態であれば、生きていくことができるのか。・・・・・。永続的固定的家族関係はありえないという視点で、討議しよう。「万引き家族」の映画は、家族の在り方についての思考を私たちに促すものである。世界の先進国と言われている地は、この日本と同じように家族関係が大きく揺らいでいるからこそ、家族という形態・機能について関心が高まっている、と思われる。まさしく、今日的な問題を提示している映画であった。

さて、話は最初にもどるが、これからの本格的な縮小社会において、今までのような家族の復権に過大な期待をすることは、大きな誤りである。未来では、家族の在り方が大きく変化するしかないのだから。今私たちがイメージする家族なるモノは、この時代のモノでしかないのだ。『崩壊五段階説』の著者は、「家族」に対してどのように思っているのであろうか。アメリカの古き良き時代の家族観への復帰をねがっていたのであろうか。どうも、そのように思えるのだが、・・・。

さて、今後どのような家族の形態になったとしても、近代社会の成果を全否定してしまうのは、前時代的大家族制に復帰することを構想することは、これまた大きな間違いであろう。では、どのようなものなのか???

・・・

＊参考資料 『二千年紀の社会と思想』見田宗介　大澤真幸(太田出版)から

P25-26

近代の資本主義社会になっても、「男性優位の家父長制家族のシステムが存続した。それは、性的役割分業をともなう核家族的なユニットが成長する社会では機能的であり、非常に有利だったからです。男が外に出て働き、女が銃後の支えとなるという家族の形態が、経済成長が必要な社会における競争にとってたいへん機能的だった。家父長制的家族のシステムが崩壊し、それを支えていたイデオロギーも衰退してくる。つまり、成長の足枷(かせ)から逃れると、それぞれの個人が、男性と女性が、自由に平等に自己実現しながら、家族の在り方を自由に選び、組んでいくことも可能になってくると、つまり、成長という枷がなくなった時、自由と平等という近代の理念がはじめて、実現しうるものになった。」

P27

「近代家父長制とは、日本で言えば、高度製剤成長期の 1960 年代の家族が典型的ですが、仕事中心のモーレツ社員と、それを支えるシャドーワーク的な主婦というイメージです。」

映画「家族はつらいよⅢ一妻よ薔薇のように」はこの世代そのものの物語であるが、大企業のエリート社員であり高収入の家族であるがゆえに、今も続いている。しかし、このような家族関係は、多数派ではない。もう、消え去る運命にある。

P28

「この近代家父長制は、高度経済成長が終わると、崩壊に向かうのですが、それは闘う必要がなくなり、無理して頑張る必要がなくなったからです。・・・家父長制に連動する性モラルもそうです。一夫一婦制を前提とする必要はないじゃないかと自由を求める人が出てきた。それが日本でもヨーロッパでも解体したのが現在です。」